

平家物語圖會
前編
六

13
2693
6



2593
6

平家物語圖會卷之六

目録

- 小督殿と捕尼とる。木曾次郎冠者義伸信州を鎮と建る
官奴共楓の落葉と暴せし依責の久む風流と賞せしれ圖
彈正太弼仲国秋夜馬を弛く嵯峨野に小督殿と訊る圖
- 四国西國平家小背太政入道執病に逝去城資永永茂の軍事
入道相國千手木と湛く執病と凌る圖
城資永出陣雲雷小掩り々圖
- 越前國大燧城軍加賀國磁浪山軍木曾殿妙策
羽丹生八幡願書と納る圖



平家物語

平家物語圖會卷之六

平家物語圖會卷之六

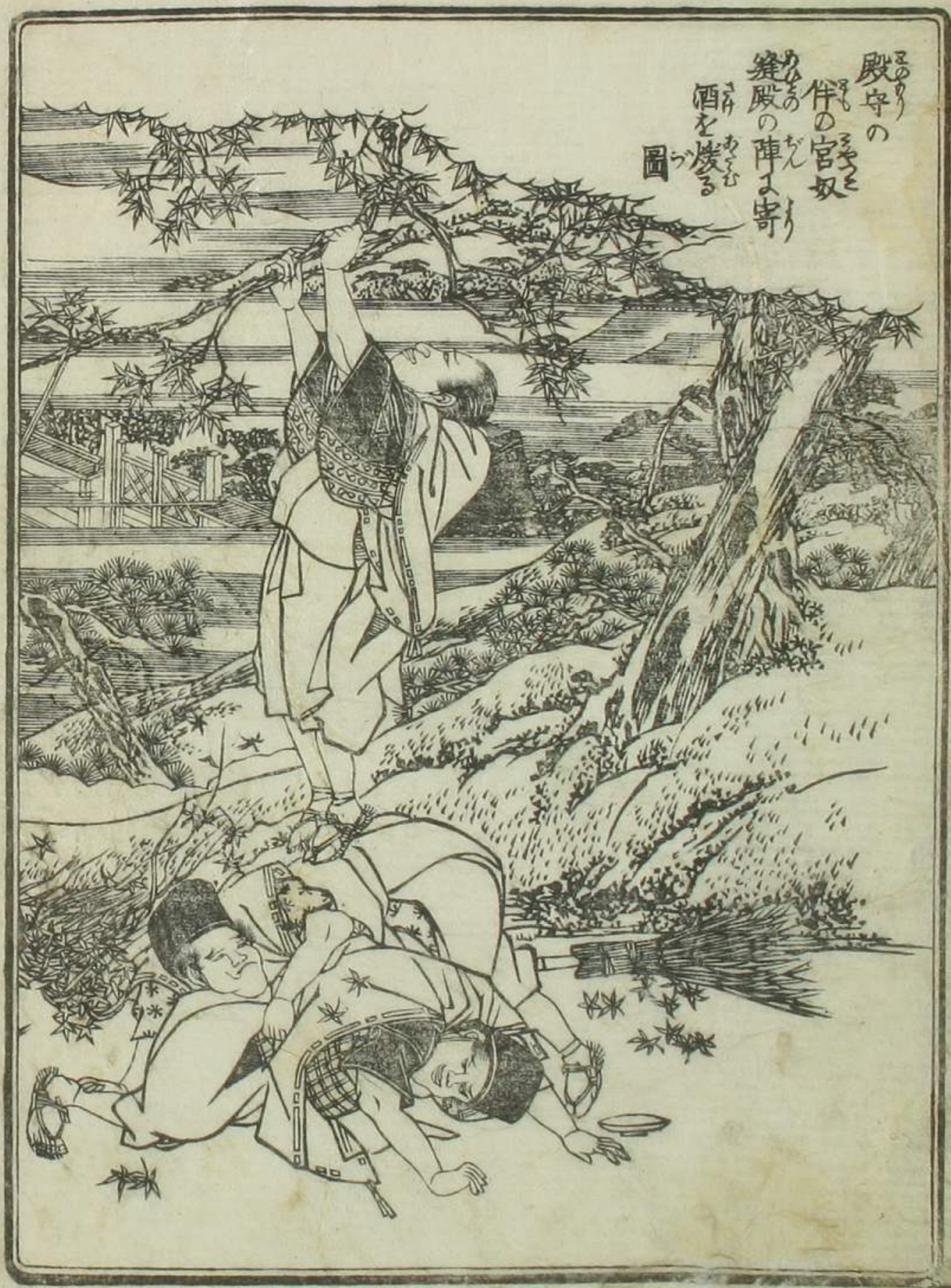
平家物語圖會卷之六

東武 高井蘭山翁述

小督殿と捕尼とる。木曾次郎冠者義仲信州の旗を建
 新院御謚號と高倉院と稱し奉る。高倉宮あり舎弟新院の
 嘗て幼少より。柔和の生質あり。成人すして。殊更
 憐惠深く近世の聖天子とやあつ。さき人々順附奉る。延喜
 天曆の帝ふかりあり。賢王の名を揚仁徳の行と施し。清
 濁を別し。その上の心ある。此君兼安の比。十歳をり。赤い
 人跡の外紅葉を愛する。北の陣小山を築く。櫓楓誠色あり
 赤う滂る。植さ終日厭覽あり。或夜暴風なり。吹く紅葉
 皆吹散。庭上頗狼藉あり。殿守の伴の官奴朝浄とて。是を悉く掃捨

けり。残る枝散る木の葉を六搔聚て風はるかり朝の霞の陣
 小寄酒煖く賜け。薪火しげり。奉行の藏人行幸より先小とまき仍て
 みる。赤方る。いづれと問はる。と答ふ。藏人浅様ももうはる。君愛執
 り。紅葉を跡形さるる。せしは。赤禁獄流罪もせし。且。この方る。いづれも逆
 鱗の預人と。案ト續る。如小主上夜の殿に敢あらば。彼へ行幸成て。蔵人
 あり。あやうけ。いづれと問はる。蔵人。俄のこも。奏と。さ。旨も。有の
 意。奏聞。天氣。殊。快氣。お。笑。せ。の。林。間。燐。酒。焼。紅。葉。と。言。詩。の
 意。と。其。等。誰。教。優。う。も。仕。つ。氣。持。さ。と。却。蔵。感。の。り。上。六。何。の
 口。沙。汰。も。あ。り。又。安。元。の。比。呂。方。遠。の。行。幸。の。り。ふ。こ。こ。で。不。難。人。曉。唱。声。明
 王。の。眠。を。驚。け。行。も。成。り。か。い。つ。も。山。痕。覚。か。ら。い。く。つ。や。く。脚。履。も。成。と。さ。り
 け。い。づ。れ。海。霜。夜。の。烈。き。火。延。喜。の。聖。主。國。土。の。民。共。が。い。る。る。行。ゆ。寒。か。う。ん

と。夜の殿より。御衣を脱せ。ひける。と。追。ひ。石。か。く。吾。帝。徳。の
 至。ら。ぬ。と。涙。ぞ。ぬ。敷。あ。ける。良。深。更。ぬ。及。ん。ど。程。遠。く。人。の。叫。声。け。り。供。奉
 の。入。ら。ず。は。と。主。上。も。早。く。さ。さ。り。何。者。さ。ら。と。春。且。と。仰。け。上
 臥。し。る。殿。上。入。上。日。の。者。小。仰。せ。く。尋。さ。ま。且。或。十。字。街。小。怪。の。女。の。童。の
 長。持。の。蓋。提。さ。ら。泣。え。の。ふ。と。向。バ。主。の。女。房。院。の。御。所。小。は。ぶ。が。此。程。漸。み。裁
 衣。を。持。つ。さ。ら。唯。今。男。二。三。人。来。く。奪。取。玄。ぬ。今。い。ぬ。装。束。さ。あ。ふ。ら
 ぞ。院。の。御。所。小。は。せ。給。と。め。又。さ。ら。く。立。宿。せ。ぬ。親。き。方。も。さ。ら。は
 是。を。思。ひ。續。る。悲。し。と。く。泣。え。り。彼。女。童。を。具。し。と。さ。ら。く。此。よ。り。奏
 聞。さ。り。け。し。主。上。や。百。あ。る。無。慙。何。者。の。云。為。ぬ。あ。る。ん。と。龍。顔
 け。り。ぬ。涙。を。流。さ。せ。給。ふ。を。番。々。竟。の。代。の。民。の。心。の。直。ち。る。瓜。め。つ。心。と
 故。小。皆。直。今。の。代。の。民。の。心。を。以。心。と。故。小。軒。者。朝。小。在。く。眼



殿守の
伴の官奴
を殿の陣より
酒を焼く
圖

を犯は是朕が愧みあふれやと仰ける。さるゆゑもあはつる衣何の色ぞと仰下さるけは然くの色と奏は建礼門院の事其時中宮めく渡せり左様の色しる御衣いと尋ありけは先より遙色の嚴しきありし女童給みける未夜深し又さる目も逢ふましたる上日の者餘多添く主の女房の局も送せ給ひえされだ賤の男賤の女をく此君の千秋萬歳の宝祚を祈しとや何より又哀ありし中宮の女方候とける女房の召仕ける上童以さる龍顔咫尺するところけり唯尋常白地ゆもさる真成ふ志深かりけは主の女房も召仕は却く主のどくろた軟待ける當時遙放ふ云とあり生男勿喜歡生女勿悲酸男是不封侯女爲妃立后は揚太真が玄宗皇帝の妃と冊と揚貴妃とゆゑとされ其一族悉く出世する

時の俚語に辛ひなるは此人女御右代持成は因母仙院とも仰せり見とく其名を葵前とせけは内々葵女御と叫あり主上風説をせり召其後八百さるは是は志の竭ぬるあはれ唯世の満と憚せりあはれさるは眺からゆやく供御もせりめはは悩とく常々夜の殿の入り心座其時の関白松殿此や成まつ主上心尽ぬるところ坐る中慰め進みせんとく急ぎ奈内りく左様小敷慮め掛らせ坐さんゆひては何茶とらぬ件の女房召と進ませばと見は科尋らる及をば基房頼く猶子ふはせいと奏しぬを主上仰めり位をすつと後さるる例もあはれ正しう在位の時三様のては末代の御をさるては名入さる関白殿も力及なはは決を押し罷出る其後主上縁の薄様の与ては深かりける古き言ち天の石とてかくそあはれける

五尺の音聞か来り

今泉少將隆房是を給り續ぐ。件の葵の前を給せしは是をぬく懐
 小入顔打被を削るる心地をまろりと。里へ歸りて打臥と五六日と終
 空く成ゆけり。君が一日の恩の爲小妾が百年の身を誤とんやうの工成や
 金に昔唐の太宗鄭仁基の女を元觀殿へ入るとまゆひける。魏徴彼娘を
 既小陸内小約せりと。疎けしは殿へ入らるるを止らるる。小少も遠ぬ
 今の君の心操るるを人しける。主上の恋暮の涙小少も百沈せり。ひも
 慰めぬんとて中宮の由方より小督殿と。女房を建せらる。その此女房
 と。入。櫻西中納言重教卿の娘ぬ。禁中第一の美人双るは翠下の上
 冷泉大納言隆房卿未少將あり。時え初より女房ぬ。始ハ歌を流
 文を尽さしげと。玉章の数の積。蘇くけりあり。流石情

弱る心ゆや竟ゆ麻多ひけり。あまども今ハ君へ百とる方る。悲しくも
 飽ぬ別の涙ぬ袖をす。干あぞ少將のゆも。小督殿を今二目
 又なる工ゆと。其更と。常ハ奈内せられけり。小督殿の座ける局の
 邊彼方此方へ佇立歩ゆひけと。吾君へ百と進まると上ハ少將のゆ
 とも。知をも通を。傳の情を。掛らむ。少將のやと。
 歌一首小督殿の局の脚簾の中へ投入らる。
 小督殿の空に陸多れ。ちの。電を。ひき。
 小督殿の空に。返る。せま。け。君の。影。を。捕。ま。り。
 心ぬくも。見。え。上。童。の。捕。ま。り。内。に。投。げ。少。將。情。を。
 怨。う。あ。は。た。さ。人。も。見。と。空。怖。く。懐。引。入。り。け。り。
 猶立歸せ

玉章今もあつたふとてわけてもいひまのまを

今ハ世ゆく相えんとも難けと生居く左右の人を恋と思ふより。唯死んとのも願はける。入道相困此の風小宮の中宮とすも女。少将も又賀之小督殿ふ二人の聲とあそこの世の中好す。此沙汰を焼く。督殿とむか。失んとぞ宣ひける。小督殿も。我身の上も何ともあそ成ん君の心苦。紛と出行衛も知れ失らとける。主上の。入せの。坐ける。入道殿叔の君小督の。錯の女房達をも。らるる。入道殿の權威と怒と。通入臣下も。男女打。禁中

思く。主上の。人ヤ在くと。直宿小糸の。仰下さる。督が行。内不在と。主の名を。此月の。内裏ゆく。時吾苗の。平家物語圖會卷之六

宵知んするのひ。嗟峨野の在家いくほどうあらん打廻つて尋ん小をさ
あひい夜。御書をとひいへば。浮空とよ思されいへめ。御書を賜ふ。あひいんと
や上る小主上理るりとも。頼く宸筆を添ひ下さ。寮の馬小乗と
まよと仰小依く。仲困馬出さ。明月小策と場西をさ。歩せける
小鹿鳴此山里と旅トけん。嗟峨野の辺の秋の比さ。哀れも受けあ片折
戸を屋をえ付く。此内小のや坐はんと扣く。空に響けども。琴下弾処を
ありけり。御堂をえも糸り。多るるとりやと釋迦堂をトめ。諸堂をえ思と
於。小督殿小似く。女房ごもるりけり。空しく帰て糸り。さらんハ糸り
ざらんより。中くあ。是より何地も迷ひ行をよと。何困
王地さぬを藏す。宿もを。つとんと寮ト頼不。戒や法輪之程近

けま月の光小誘つと。糸り給ると。其方向くぞ浮岩さる。龜
山の傍近く。松の村ある方方小幽小琴を変ける。峯の嵐を松風を尋ん人の琴
の音と。覺束をく。多くた駒を早め。行程小片折戸をる内小琴を弾
澄さこり。控くゆをハを糸り。小督殿の爪音ゆく。兼を何ぞと耳を
澄す。夫を想ひ恋と。判想夫恋と云兼をりけり。仲困をさ。君の心を
多くひか糸りく。兼もマな小此曲を彈ト入と。優け色と。門をく
打鼓バ頓く琴ハ彈止給ひぬ。是ハ内裏より。仲困を使小糸りく。内
さを給へと。敲けども。各る者もをりけり。中あつて。内より人の心を
音けり。嬉しく。多く待処小鎖を如し。門細め小用勿氣し。小女房の糸
斗指かく。内裏より。使を給る。若小侍バ若門遠くぞ。傳
えと云ける。仲困返事ハ門闔鎖指と。是非るく押扇く入けり。妻

多不 仲國へ入道殿の還安のんぬり飾けはた勅定る且不入車借く
嗟峨へ行くる小督殿あるやと宣ふを種と賺し拵く車小乘
内裏へ伴ひまりけと出ある所小忍心を夜く召しける程小姫宮は
一所出来させ多ひけり坊門女院と此宮の心なるなり入道相國小督
失りりと云ふ跡方もある虚言えりゆり失んとる丁ごつひ小謀
小督殿を捕へ尼ふる追放する年二十三女家へ元來をるはかかき
小尼ふるまは濃墨染ぬ寢果嗟峨の奥に栖且下無下方見とたえ
主上へかまうのりたも繼つせあ品との内襟ありとと受けは皇
めは連續の歎のほろけるる水方宮第二の皇子二條院崩御あり
安元二年七月ふ孫六條院隠させのひ天小栖比翼の鳥地ぬ在連理
の枝とちると銀漢の星を指くささる契浅くさざり建春門院

秋の霧小立かくは朝の露と消さむひぬ年月隔と昨日今日の
別の様ゆき言くと涙も替ぬぬ治承四年五月の第二の皇子高倉
宮討とるひ現世後生憑り言とる新院と先立せのひぬと免小角
小光とるは涙ぞほろり悲の至と悲き老く後子ふちとる
悲たへる恨の至と恨た若く親小先とる恨りたへる
朝細相公の子息澄明小後とて書とて今そと召かるとけれ彼
一乘妙典の心積痛も忘せらる三密行法の心蓮修も功積せぬ座天下
涼階ふたりいづ大宮人も推並と花の袂を窺けり入道相國斯近い
く情とる當りまるとる流石空恐くやとけは法皇を慰め
進とせんとも安藝嚴島の内侍少腹の姫君生年十八と成る入法皇
進とせる當家他門の公卿言くえ送りく偏小女御まのよとく

平家物語卷之六



平家物語圖會卷之六



仲國秋夜馬を
 馳せ嵯峨野に
 小督殿とがる圖

平家物語圖會卷之六

中をひける上皇隠ととせぬ人僅小二十七日もさるる小然るべくらばとぞ
 入く私語合まける。玄程の其比信濃國の木曾次郎義仲と云源氏あり
 と實之り。故帶刀先生義賢の次男也然る小父義賢と云ぬる父吉壽
 二年八月十二日鎌倉源太義平左馬頭義朝小討と其時義仲二歳也母
 抱く泣く信濃へ下り。岐嶺の中二兼遠が并推頭中原の兼遠行く。のり
 ゆもく人ともゆり。ゆりまると云を号そす。こく八幡太郎義家の曾孫
 清和源氏の血とく。兼遠もく。清合も。養育も。漸長大。武
 容俊。駿佩人小勝と心も剛。力も強く。弓箭打物も。都く上右の
 田村利仁。於期將軍知頼。保昌。先祖頼光。義家朝臣と云と。そのいで
 是必増るべと人々の多ひ。甘大方なる。十三めく元服ゆも。先八幡へ
 通夜。我四代の祖父義家朝臣。此は神の子と成。名

を八幡太郎義家と号。且其跡を追へり。とく。室前小警を取上
 木曾次郎冠者義仲と云。常八乳母の仲三小具せり。都へ上。平家の
 挙動形勢。カをも能く見窺ひけり。木曾或時兼遠を。抑前右云備
 佐頼朝へ。東八個國を打従へ。東海道より攻より。平家と追落さんとす。
 吾も東山北陸兩道と隨へ。一日も先小平家と亡。幾日本國小西
 人の將軍と仰とんと。必ひつゆと宣。兼遠大畏。悦。其料。よ
 こそ君。此二十餘年養育。奉て。か。仰らる。丁。そ。さ。八幡殿
 の御。喬。大。是。の。頃。謀。叛。と。企。先。廻。文。ある。と。東山北陸。編。り
 ける。信濃國。小。彌。井。小。弥。太。滋。野。行。親。一。番。小。属。隨。是。と。始。信。及。國
 の。皆。来。と。上。野。國。田。胡。郡。の。父。義。賢。の。好。小。依。と。出。来。と。り
 其。外。平。家。の。未。と。り。ぬ。る。節。と。る。源。氏。平。家。の。素。懐。と。遂。ん。と。く。

木曾の属する者日く小豆よりける

他書より義平義賢を殺し。秩父の畠山小命ト。孤をも害す。ト
と云ふ。尋せし義賢こそ鎌倉なる義朝の牙領を掠んとする
故殺さる。孤の何とあらん扶けごとく。以て案する。処齊藤実盛
不行遇是を頼ける。孤実盛とんく。笑ひゆる。也。不便。弥増。清取
一が乳母より信及行く。入魂せし中三兼遠を頼実盛源氏の武
士とんく。時勢に依く平宗盛公に仕へ兼遠も又怒り。當時朋軍
といひ格別親めり。兼く義仲時節と待く。旗を揚んと。兼遠
茂治で合と。此節へ兼遠京師に在。其苗主ゆ。俄小紫。又
及び。宗盛公兼遠とんく。義仲が首を討く。出さ。ト。下さ。ト
不兼遠の義仲と。不便。養ひ。い。代。謀叛。と。企る。器量。の。者。不

あ。珠。山。家。在。る。譜。代。家。子。入。も。ち。父。と。悪。源。太。殺
さ。然。然。然。頼。朝。の。あ。め。意。恨。も。く。眼。前。某。が。主。人。と
頼。む。平。家。何。と。以。り。弓。を。挽。い。ん。全。く。周。巷。の。浮。言。い。ん。と。ト
平。家。の。侍。大。將。茂。兼。遠。を。擲。置。勢。の。屬。内。の。義。仲。討。め。向。ら
べ。と。勸。げ。し。茂。宗。盛。公。半。信。半。疑。ゆ。更。決。せ。兼。遠。并。右。振
る。陳。謝。さ。る。也。も。心。を。静。ん。る。早。く。帰。國。義。仲。と。討。く
せ。と。暇。を。賜。ふ。兼。遠。虎。の。尾。を。踏。危。き。道。と。帰。國。と。侍。大。將
茂。兼。遠。と。道。す。や。と。諍。茂。宗。盛。公。吾。苟。も。當。家。の。大。將。軍。ら
何。ぞ。汝。等。が。智。慮。を。借。ん。と。大。怒。め。ん。也。せ。ひ。る。皆。退。く
知。盛。御。ら。ん。か。く。何。と。今。小。胎。と。啗。ら。ん。と。私。語。め。り。又。義。仲
北。國。の。軍。に。存。藤。別。當。を。討。く。と。觸。ら。し。也。宗。盛。公。先

少軍さる者なり。是昔の恩義を以て之れ止む。實盛討死の
覚悟を究、鬚髮の白を塗る。若死く敵のあひとあり。平
家物語といさう差ふ也。此の事を述置。

四國西國平家小背太政入道執病小莩玄城資水永茂軍事

信易岐蕪といふ所。國の南の端。美濃境ると。六都も程近。平家の
へ。東國の背。さあふ。北國。走らゆ。大に恐。馳せける。八道
殿宜ひける。後。信濃一國の者。たこそ。木曾。小隨ひ附と云。越後國。小
へ。於期將軍の末葉。城太郎資永。同四郎資茂。是等。兄弟。小三勢
の者。仰下さ。易く討。進せん。と宜。六。実の。中。人もあり。いやく
唯今の大事。小及んと叫。人ともあり。二月朔日。除日。行。越後國の
住人。城太郎資永。越後守。任。是。本。木曾。追討。ある。死。謀。を。之。る

同七日大臣公卿家々。い。く。尊勝陀羅尼。ち。び。不動明王。書。供
養。せ。所。こ。こ。乱。慎。の。る。と。す。一。同。九。日。河。内。國。石。川。郡。小。居
住。し。ける。權。守。入。道。義。基。子。息。石。川。判。官。代。義。兼。也。も。平。家。を。背。頼
朝。卿。心。を。通。り。東。國。へ。落。ん。と。ゆ。へ。平。家。討。ひ。を。せ。り。ける。大
將。源。大。判。官。季。貞。攝。津。判。官。盛。澄。三。十。餘。騎。を。引。具。河。内。へ
發。向。ひ。城。の。内。に。義。基。法。師。を。始。り。百。騎。斗。ひ。過。さ。り。けり。卯
刻。り。矢。合。せ。し。日。戰。暮。し。夜。一。入。け。義。基。法。師。討。死。す。子。息
判。官。代。義。兼。へ。痛。み。負。て。生。捕。と。さ。る。同。十。一。日。義。基。法。師。首。都。へ
入。大。路。を。渡。さ。る。涼。層。小。賊。首。を。渡。さ。る。堀。河。院。崩。御。の。時。前
對。馬。守。源。義。親。が。首。を。渡。さ。れ。其。例。と。す。明。る。十二。日。鎮。西。より
飛。脚。到。來。宇。佐。の。大。官。司。公。通。や。と。い。え。く。鎮。西。の。者。緒。方。三。郎

維義と肇白杵戸次松浦亦至る。一向平家を背く源氏も同心のより。やうけは平家の人。東國北國の背。上西國迄かくあはれ。みふと眼を合せ。驚き危り。同十六日伊予國の飛脚より。備後の冬より伊予國の住人河野四郎通清。源氏も同心と云ふ依る。備後國の住人額入道西寂。平家も志深。うり。ゆ。そ。二十餘騎。伊予國み押渡り。道前道後の境。高直の城。推寄。さ。み。攻。け。は。河野通清討死。子息通信。安藝國住人奴田次郎。と云者。母方の伯父。うり。類。在。合。は。父。を。討。せ。く。安。う。り。は。ひ。い。ゆ。も。く。西。寂。を。討。んと。窺。ひ。け。る。額。入。道。西。寂。は。四。國。の。狼。藉。を。鎮。め。今。正。月。十。五。日。備。後。の。鞆。へ。押。渡。り。遊。君。を。集。め。遊。ひ。戲。と。酒。宴。あ。る。所。へ。河。野。父。の。名。成。繼。四。郎。通。信。を。切。り。者。も。百。餘。人。相。語。く。な。ら。と。推。寄。西。寂。が。方。中。

三百餘人。け。た。成。の。と。を。多。く。諸。と。周。章。ゆ。め。死。け。る。が。立。止。ま。ぬ。の。へ。射。伏。切。伏。先。西。寂。と。虜。く。伊。予。國。へ。押。渡。り。父。が。討。と。高。直。の。城。まで。堤。持。行。裾。め。く。首。を。切。り。た。又。磔。に。掛。り。た。り。其。後。へ。四。國。の。者。は。河。野。四。郎。も。隨。ひ。附。ぬ。又。紀。伊。國。の。住。人。熊。野。の。別。當。湛。増。へ。平。家。車。息。の。身。を。り。ぐ。忍。ち。心。変。り。く。源。氏。も。同心。の。より。さ。へ。く。平。家。の。人。東。國。北。國。南。海。西。海。か。く。の。ど。い。夷。狄。の。蜂。起。耳。を。駭。し。逆。乱。の。先。表。類。も。奏。し。四。夷。既。に。起。り。世。既。に。失。ひ。を。ん。と。す。と。必。平。家。の。一。門。も。あ。ら。ず。孫。も。あ。る。人。々。歎。き。悲。め。ぬ。ち。り。け。り。同。廿。三。日。院。の。殿。上。ゆ。く。俄。に。公。卿。會。議。あり。前。右。大。將。宗。盛。卿。も。さ。る。今。度。坂。東。へ。討。み。へ。向。ふ。り。と。い。た。さ。は。せ。る。仕。事。と。る。と。さ。う。今。度。へ。宗。盛。大。將。を。兼。つ。と。東。國。北。國。の。凶。徒。亦。追。討。せ。る。よ。う。や。さ。る。諸。卿。色。代。し。と。卿。の。中。狀。勇。ま。い。く。いと。や。さ。さ。と。ける。後。白。身。御。感。

ありけり。公卿殿上人も。武官も備り。少も弓箭も携へり。人の宗盛
 次大將軍と。東北の凶徒を討つ。仰下さ。廿七日軍
 の首途。既討立んとせし。夜半なり。入道殿違例の心地と
 止り給ひぬ。廿八日ゆへ入道殿重病とせし。京中六波羅殿ありの
 けん疾附り。湯水も咽へら。身の中熱と。火を焼く。臥しぬ。知
 四五間内へ寄者。熱さ堪ざ。唯宜ふと宛々と斗も滅ぬる。こも
 さらし。餘り堪難さ。比叡山より。千手井の水を汲下し。石の板
 湛置。そと下ア。寒多。水野。湯上。程なく湯せ。ちりぬ。けり。
 石と貫の水と。石や鐵の焼く。様水。送。寄付。自ら中
 水へ。成。燃。け。黒煙。殿中。充滿。炎。洞。卷。て。揚。げ。る。こ。も。昔
 法藏僧都と云。入道王の請ふ。母の生所を尋。入道王。憐。み。獄。卒

と副。焦。焚。地。獄。へ。ま。さ。る。鉄。の。門。の。内。へ。指。入。る。ま。ま。流。星。を。こ。の。て。く。必。災
 空。小。打。昇。豆。百。由。旬。ぬ。及。げ。ん。も。是。火。過。と。受。け。る。又。入。道。殿。の。北。の。方。八
 條。二。位。殿。の。夢。さ。る。猛。火。野。う。燃。る。車。の。主。も。た。ぬ。門。の。内。に。遣
 へ。其。前。後。に。立。る。者。或。は。牛。の。面。馬。の。面。の。ど。く。車。の。前。に。無。と。云。文
 字。半。獄。の。札。小。彫。と。打。り。夢。の。内。に。其。車。何。國。へ。何。地。へ。向。ま。平
 家。太。政。入。道。悪。行。超。過。ぬ。入。り。入。道。魔。王。宮。へ。迎。の。車。と。す。あ。の。札
 と。向。ま。南。嶺。侍。提。金。洞。十。六。丈。の。毘。盧。遮。那。佛。を。焼。亡。し。罪。小。依。り。無
 間。の。底。に。沈。べ。と。入。魔。の。廳。中。に。沙。汰。る。其。印。小。に。ち。け。る。二。位。殿
 夢。覚。ま。る。汗。和。服。を。徹。せ。り。此。夢。を。談。ぬ。人。皆。身。の。毛。豎。り。り。灵
 佛。灵。社。に。金。銀。七。宝。を。擲。馬。鞍。燈。兒。弓。箭。太。刀。刀。小。至。る。近。取。為。運。平
 と。祈。す。と。け。れ。り。叶。へ。く。も。ま。る。唯。男。女。の。君。達。跡。枕。に。指。渡。ひ

歎き悲ひ多ひけり。因二月二日。二位殿熱堪難けと共。入道殿の枕小痛く。
 此形勢とんまふ。日小副く憑少く。えさせし物の少も。えさせ給ふ時以
 召とあふ。仰置とて。ありの。入道殿日來へ。も勇。敷の。せし。
 ぶ。命期ゆも。なり。く。世ゆも。苦け。小息の下ゆく。宜ふや。當家ハ
 保元平治より。以降。度々。朝敵を平げ。勳賞身小餘。不。忝くも。一天の君
 の御外戚と。く。丞相の位。至。了。榮花既。小。子孫。小。賢。ふ。今生の望。六。二。支
 り。多。ひ。置。と。て。唯。多。ひ。置。と。て。く。右兵衛佐。頼朝。が。首。を。を。ん。ざ。り。つ。
 を。何。より。も。本。意。を。一。吾。い。ゆ。め。成。人。後。佛。受。孝。養。を。と。む。を。く。堂。塔
 を。も。建。せ。く。内。急。ぎ。討。と。下。し。頼朝。が。首。を。割。く。我。墓。の前。掛。べ。
 其。ぞ。今。生。後。世。の。孝。養。と。あ。ら。ん。と。も。宜。ひ。ぬ。り。や。助。と。板。小。水。置。と
 臥。疇。ひ。又。助。と。か。地。も。なく。同。四。日。岡。絶。障。地。と。く。遂。小。あ。が。れ。死。ゆ。ぞ。

多ひける馬車の馳違入音へ。天も響地も揺ぐ。斗二天。萬衆の主。いり
 ある。此。の。在。とも。是。ゆ。争。う。勝。た。ん。今。年。六。十。四。老。死。と。さ。べ。死。ゆ。わ。ら
 宿運。忽。尽。ぬ。と。大。法。秘。法。効。験。も。ち。く。神。明。佛。陀。の。威。光。も。消。堵
 天。も。擁。護。し。ぬ。況。や。凡。慮。小。於。く。を。身。小。替。と。命。と。代。ん。と。忠。成
 存。せ。し。数。万。の。軍。旅。ハ。堂。上。堂。下。小。並。居。と。て。是。ハ。目。ゆ。も。え。ま。か。り。ゆ
 抱。ぬ。無。常。の。殺。鬼。を。皆。一。も。戦。返。と。て。死。と。叶。は。又。歸。ま。ま。ぬ。四。の。山
 三。塗。川。黄。泉。中。有。の。旅。の。空。ハ。唯。一。所。ぞ。執。せ。ける。と。て。日。來。造。り。置。と
 罪。業。む。り。と。そ。獄。卒。と。成。と。迎。ゆ。も。身。り。け。ぬ。哀。れ。り。一。次。第。を。同
 七日。愛。宕。ゆ。く。煙。と。を。骨。と。口。實。法。眼。首。小。け。攝。津。因。下。下。經
 鳴。小。納。け。り。さ。し。も。六。十。餘。州。小。威。を。振。ひ。一。入。る。と。身。小。片。の。煙。と。あ。り
 都。の。空。小。立。昇。り。散。ハ。皆。時。徧。徧。く。續。の。真。砂。と。戲。と。く。空。き。と。ぞ



世家物語圖會卷之六

成る。入葬送の夜、不思議の事ありけり。玉を延金銀を鑊く作られ
 一。西八條殿、其夜俄に焼ゆけり。人の家の焼るは、常の習ひなれば、何
 者の所為のや、あやけん。故火とぞ言へ。又六波羅の南に當り、人ちるに二
 三十人をりりか声し。嬉しや水鳴、龍の水と云拍子とりて、舞躍す。咄
 と笑ふ声しけり。去る正月、上皇隠とせせり。天下諒闇ありぬ。
 幾一両月を隔て、入道相國薨せられぬ。心ちた悔の者もいへ、憂はる
 べし。のころ是へ天狗の所為とぞ沙汰あり。平家の早雄の玄百餘人
 笑ふ声を知り、又尋けるゆ。院の御所法住寺殿、此三ヶ年、院を
 渡せ給へ。御所預り、備前前司基宗と云り、其知る者、酒
 を賣り、來集飲けるが、蒐る折節、ゆ音あせせとて、飲けるが、次第、酒
 けり。加様、舞踊ける。六波羅の玄共、是を賣付をり、押寄、酒酔た。

二三十人、搦捕く。六波羅へ率と、泰壺の内、小曳居けり。六宗盛、卿大床
 小立くるの、子細と、糺突と、実も、さきど、飲酔する者、を左右、なう、斬
 らん様、さうと。昏歸、さきけり。上下人の、失ぬる跡、朝夕、鐘打鳴し。
 例時、懺法とると。常の風俗、ちた。此禪門、薨せられ、後、聊、供佛
 施僧の、管も、さう。日夜、軍合戦の、談話も。又他、言さうり。入道、殿を
 唯人、とも、まぬる。こそ、まうりけり。日吉の社へ、まのひ、いり、當家、地
 家の、公卿、多く、供奉し。扨、祿の、臣の、春日、の、泰、清、氏、入、ち、り、た。是
 ゆ、い、で、勝、ぶ、べし。と。人、や、ける。何、より、も、又、福原の、經、島、と、築、と、
 上下、往來の、船、今の、世、定、も、煩、ひ、さ、れ、こ、そ、目、出、度、け、は、彼、島、へ、さ、る。應
 保、元年、二、月、上、旬、ぬ、築、始、ら、と。一、小、同、八、月、二、日、俄、に、大、風、吹、大、波、と、
 皆、陶、矢、ひ、ら、り。同、二、年、二、月、下、旬、阿、波、民、部、重、能、と、奉、行、め、く、築、と、

けるふ人柱を立ちらるる。公卿僉茂あり。其の中、衆業
をふし。石の面、一切經を書き、築とせり。此の經嶋と申すなり。又
都はのころ、便不便のゆゑも、いとよきとて、叶ぬとえたり。

平家物語、清盛公の天台の慈惠僧正の化身とて、摂津國
清澄寺の慈心房尊惠が夢の窟魔王の物語を直し、又七言
四句の頌を授らる。外、一、一章の頌を是れ入道とて、示さる。白
何院の持經上人の化身と云、入道の悪行も世の人の為、小自化
の利益をなす。彼提婆と釈、同衆生の利益、小異、ち、段
の餘り、現戯、等、一、れ、を、削、去、く、こ、る、載、は、殊、に、四、句、の、頌、と、云、の、
窟魔の作ゆりあり。いとよきとて、叶ぬとえたり。

同日、病付く。同月卒まあり。一、ぞ、不、必、後、ある。同廿二日、宗盛卿院、奉、
と。法住寺殿へ去る。応保元年、四月十五日、造出とて、新日吉、新熊野、
近う、勸、精、一、まり、山水、木、立、必、百、ま、り、一、が、種、の、ゆ、る、が、ゆ、り、と、此、
二、三、个、年、の、院、も、渡、せ、ら、れ、御、所、も、破、壞、せ、ら、れ、修、理、し、御、幸、を、奉、り、
ま、り、と、旨、奏、聞、せ、ら、れ、一、は、法、皇、何、の、様、も、な、ら、ず、疾、と、と、御、幸、を、奉、り、
先、故、建、春、門、院、の、御、座、ける、方、を、御、覽、せ、ら、れ、岸、の、松、の、柳、年、經、て、
水、高、く、去、ら、れ、大、校、の、実、苺、未、央、の、柳、見、ぬ、向、ひ、る、人、争、つ、泣、
進、ま、ら、ん、彼、南、内、西、宮、の、昔、の、跡、今、こ、そ、ひ、ち、く、と、け、れ、三、月、朔、日、
都、の、僧、綱、等、皆、救、と、本、官、に、復、し、末、寺、庄、園、一、所、も、相、違、あ、ら、ぬ、
く、ら、る、一、被、仰、下、同、三、日、大、佛、殿、支、始、あ、り、奉、行、ゆ、前、左、少、弁、
行、隆、ぞ、ま、り、と、ける。同、十、日、美、濃、の、目、代、早、馬、を、以、て、都、へ、サ、ける。源

同日、病付く。同月卒まあり。一、ぞ、不、必、後、ある。同廿二日、宗盛卿院、奉、
と。法住寺殿へ去る。応保元年、四月十五日、造出とて、新日吉、新熊野、
近う、勸、精、一、まり、山水、木、立、必、百、ま、り、一、が、種、の、ゆ、る、が、ゆ、り、と、此、
二、三、个、年、の、院、も、渡、せ、ら、れ、御、所、も、破、壞、せ、ら、れ、修、理、し、御、幸、を、奉、り、
ま、り、と、旨、奏、聞、せ、ら、れ、一、は、法、皇、何、の、様、も、な、ら、ず、疾、と、と、御、幸、を、奉、り、
先、故、建、春、門、院、の、御、座、ける、方、を、御、覽、せ、ら、れ、岸、の、松、の、柳、年、經、て、
水、高、く、去、ら、れ、大、校、の、実、苺、未、央、の、柳、見、ぬ、向、ひ、る、人、争、つ、泣、
進、ま、ら、ん、彼、南、内、西、宮、の、昔、の、跡、今、こ、そ、ひ、ち、く、と、け、れ、三、月、朔、日、
都、の、僧、綱、等、皆、救、と、本、官、に、復、し、末、寺、庄、園、一、所、も、相、違、あ、ら、ぬ、
く、ら、る、一、被、仰、下、同、三、日、大、佛、殿、支、始、あ、り、奉、行、ゆ、前、左、少、弁、
行、隆、ぞ、ま、り、と、ける。同、十、日、美、濃、の、目、代、早、馬、を、以、て、都、へ、サ、ける。源

平家物語圖會卷之六

十一

氏まで尾張國近責上り。道を塞一向人を遠さぬ。成演説は足
 ぬ依く討むを向らる。大將軍ぬ左衛門督知盛。左中將清經
 小松重盛公。少將有盛。丹後侍従忠房。侍大將ぬ越中次郎兵衛
 盛續。上総五郎ぬ衛忠光。悪七ぬ衛景清を先とし。其勢都合三
 万餘騎尾張國へ突向ひ入道殿薨と多ひ五旬をさふ満ごうぬ乱れ
 ころ世と云ふ。浅様きぬさす。源氏方ぬ十郎藏人行家。右馬
 佐殿の弟卿公義圓。其勢六千餘騎を従へ尾張河を隔と。源平兩
 方陣取。六日の夜よへ。源氏六千騎河を渡。平家三万餘
 騎の勢の中懸入寅の刻より。夜明やぐ戦ける。平家の方ハ少そ
 騒ば敵ハ川を渡。馬物具も皆濡らる。其をさす。討れとて
 源氏を中取籠。我討取んと進む。卿公義圓深入し討れたり。

十郎藏人行家散く。戦ひ家子郎等多く射させ力及。河より
 東へ引退く。平家頃く川を渡。落行源氏を追物射し行ぬ。あ
 そ此ぬ返。合せ防ぎ戦ふ。た。勢無勢叶ぬ。くもさ
 けり。水駅を後よとる。と云ふ。今度源氏の謀ハ疎と人やける。
 十郎藏人行家ハ引退き。河國ハ打越矢。別川の橋を引。捨積ぬと
 待たり。平家頃く續責も内。終に攻落。さぬ。猶も續く
 責ぬ。参河遠江の勢ハ容易附。大将知盛。勞あり。河
 國より都へ歸て上ら。今度も僅に陣を破ら。残黨を
 攻。平家ハ。年小松大臣。患。ぬ。
 今年又入道殿失ぬ。運命の末。頭。年。本。思。願。の
 者。外。隨。属。者。あり。けり。東國ハ。草。木。も。皆。源。氏。ぬ。麻。け。る。平

家此時尾め川を前と陣せ。地をぬく。洲股合戦と云傳へり。扱又越後國城越後守資永受領せし朝思を報せん。木曾を追討す。三万餘騎を卒し信濃國へ奔向は六月十五日首途し。既小四五里行。俄に空撥曇り。雷駭し。鳴く。闇夜のどどり。数く閃く。電眼を打。大雨車軸を漂ひ。中々霽んとまける。虚火を喘。個声し。金銅十六丈の盧遮那佛を焼亡し。大悲の平家の方人。さる者らあり。召取やと二度叫んど通まける。資永を始とて。とを交兵とも。身の毛も愈堅覺けり。即從一同。斯恐し。天の坐す。いふ唯理を枉く。留せ。と辣け。巴。矢。身。は。ま。ま。は。依。金。と。又。二十餘町行。りける。黒雲二群。ま。ま。の。資。永。が。上。覆。ふ。と。ま。ま。が。忽。ち。身。禁。心。怒。り。落。馬。し。り。輿。小。舁。と。館。へ。歸。り。打。取。と。三。時。を。り。遂。に。死。

せり。脚を以て。此。し。や。う。け。ま。平家の人々大に恐と騷とけり。同七月十四日改元有と養和と号し。其日除目行と筑後守貞能肥。後守小成し。筑前肥後兩國を給し。鎮西の謀叛人を平げん。の。平。餘。騎。め。鎮。西。へ。奔。向。は。又。其。日。非。常。の。赦。行。と。ま。ま。の。治。業。三。年。の。流。され。給ひし。入。と。皆。都。へ。召。返。と。ま。ま。の。前。関。白。入。道。松。殿。備。前。國。より。上。せ。給。ひ。妙。音。院。太。政。大。臣。師。長。公。へ。尾。張。國。より。上。洛。せ。られ。按。察。使。大。納。言。資。方。卿。へ。信。濃。國。より。歸。洛。と。ぞ。ま。ま。の。自。井。八。目。妙。音。院。殿。院。泰。玄。め。る。長。寛。の。歸。洛。也。御。前。の。簀。子。ゆ。賀。王。息。還。城。樂。を。彈。ひ。し。ち。養。和。の。今。の。歸。京。也。仙。洞。より。秋。風。樂。を。彈。ひ。し。何。れ。風。情。折。を。公。召。し。せ。り。ひ。ける。心。操。ま。そ。め。て。け。ま。按。察。使。資。方。卿。も。其。日。同。院。泰。玄。め。る。法。皇。獻。覽。也。り。ゆ。り。ゆ。り。此。こ。ろ。入。習。ぬ。郡。の。住。居。し。て。郵。

曲も今へ定る。迹形ありしとて、白ども先今様一あまう
と仰けし。寶方卿拍子取。信濃みちなる木曾路川と云今や
是へ正し。ふんやまこりし。信濃みちありし木曾路川と歌をよける
こそ時ふあくの高名なる。妙音院取尾張へ流さまのひ一時罪を
し。配所の月をまんとひひ心ある際の人願ふとちまへ大臣敢て
事とそし。彼唐の太子賓客白樂天。潯陽の江の邊徘徊
久ん其古を想像。嗚海浮朝路遠は遠ん。常は朗月を望。浦風
み嘘き琵琶を弾。和歌を詠。等閑ぞ。月日を送り給ひ。二
戎時當。第三の宮。契田明神へ。参詣あり。其夜神明。法樂のあ。二
琵琶と。彈。胡。胡。の。本。より。無。智。の。境。ち。ま。情。を。知。る。者。も。也。
絶老村女。漁人野。頭を低耳を。後耳と。い。た。更。は。清。濁。を。分。ち。呂。律。を。

知る。と。て。天。胡。巴。琴。を。弾。せ。り。と。て。魚。鱗。踊。送。虞。公。歌。を。奏
せ。り。と。て。梁。塵。動。搖。物。の。妙。を。究。る。時。へ。自。然。に。感。を。催。り。理。る。ま。諸。人
身。の。も。隆。く。満。座。奇。異。の。多。ひ。を。ち。漸。深。更。は。及。ど。潘。杏。凋。の。内。外
花。芬。馥。の。氣。を。銜。し。流。泉。の。曲。の。回。り。月。清。明。の。光。を。争。ふ。願。ふ
今。生。世。俗。文。字。の。業。狂。言。綺。語。の。謬。を。以。と。と。朗。詠。を。し。秘
曲。を。彈。ひ。し。神。明。感。忘。み。堪。ら。ず。宝。殿。大。に。震。動。し。平。家。悪
行。る。り。也。今。此。瑞。相。を。争。う。并。む。死。と。と。大。臣。感。涙。を。流。さ。ま
し。と。と。扱。も。八。月。七。日。官。廳。あ。り。と。大。仁。王。會。行。る。具。將。門。追。討。の
例。と。と。又。し。九。月。朔。日。あ。り。純。友。追。討。の。例。と。と。伊。勢。太。神。宮。鐵。の。甲
冑。と。と。せ。ら。る。勅。使。の。祭。主。神。祇。權。大。副。大。中。臣。定。高。へ。都。を。立。と
江。列。甲。賀。の。驛。より。病。歿。し。同。三。日。伊。勢。の。離。宮。あ。り。と。と。遂。に。死。せ。り

又調伏の爲五壇の法兼く行ひける降三世の大阿闍梨大行事の
 彼岸所ありて寝死し死す神明も三室も偕し御納受ると云と
 掲尊又太元法兼つて行ひける安祥寺の実玄阿闍梨が巻教を
 進せざるを披えせしむる平家調伏の事注進せしむる仰
 けし六朝敵調伏せしと仰下さし由もあつて當世の躰をえいし平家
 専ら朝敵と存られぬよろしく彼を調伏する何の外言ふべし此
 法師奇怪死罪流罪と沙汰ありしごとし大小の念劇打紛と
 と何るも打たせしむる平家七比源氏の世とあり此支鎌倉又
 皮へ頼朝卿其器量と賞せしと僧正よき下さし同十二月廿四日
 中宮院號を蒙らせしひ建礼門院とぞせしける主上のまこと幼少の也
 時母后の院号は是を始とせしむる今年も暮と養和二年

とちる節會以下常のど。三月廿一日太白昂星を侵す天文要録小
 いづく太白昂星を犯せし四夷起。又將軍勅命を奉つて國の境を
 出ださし。其三月十日除目行は平家の人々大畧官加階あがらぬ
 四月十五日前權少僧都顯真日吉社小。如法法華經二万部
 轉讀致さしとあり。結縁の爲とく。法皇も御幸あり。何者の
 中出けるやん一院山門の大衆仰。平家追討せしむるべしと仰
 六軍内裏へ参り。四方の陣頭を擧言固ま。平氏の二類皆六波
 羅へ馳集りける。本三位中将重衡卿其勢三千餘騎ゆ。日吉
 社へ参向は山門小又又々々平家山攻せん。登山せしむ。大衆
 東坂本へ降下。このふと余我も法皇も睿慮を極めしむる
 まは公卿殿上人も色を失ひ北面の輩の内餘も周章噪く。



平家物語圖會卷之六

九



城資永出陣
雲雷に掩る
圖

平家物語圖會卷之六

九

黄水吐り多うり。洛中山門の騷動大方さる。玄平の重衛
 卿穴太の邊ゆく。法皇を迎へ進ませく。都へ還御あり。院山
 門の大家より仰く。平家を追討ありと云ふ。平家又山攻せんと
 云ふも。凡そ迹なき虚事なり。只天魔の能荒るふこそ人なり。
 法皇仰々らん。かくはとあらんゆへ此後ハ物若るやゆりも必し
 任じまらば。王やんとぞ仰ける。同廿日二十二社へ官幣使を立らる。
 是ハ飢饉疫疾行る小依と云。新院崩。あは後ハ法皇と申す。却て給へり。皆也
 越前國火燧の城軍。加賀國砥浪山軍。木曾殿妙策
 同五月廿二日改元あり。壽永と号し其日除目行と云。越後國の住人
 城四郎資茂を越後守に任じ。兄資永死去の間不吉いと云ひ。頼小辨
 けは茂勅命さる。力及む。是より資茂を攻め。永茂と更名に

玄程の九月二日。越後守永茂木曾追討の爲越後山羽會津四郡の玄
 茂を引卒し。都合其勢四方餘騎信濃國へ発向。同日當國横田河
 原陣を木曾義仲ハ依田の城に在けるが三千餘騎あり。城を出馳
 向ふ。爰ハ信濃源氏井上九郎光盛が謀。小三千餘騎を七ひひ分。俄ハ赤
 旗七流作。ふくふく上。あそこの峯。爰の洞より寄ける。越後勢
 是をまろ。あは此國も身方のひたる。力付ぬと云。勇ハ悦ぶ。卒
 次第ハ近う成ける。相圖を定む。七ひひひと成。赤旗ハ切弁とせ
 兼く用意せし。白旗と颯と翻。に因を嚏と作ける。越後の勢ハ是
 をえ。あは謀らむ。あけり。敵何萬騎あり。らん。菴らとて。叶ハ
 せ。と。周章狼唄ける。或ハ川へ追入られ。又ハ惡所へ捲墮。さ
 助る者ハ少く。討る者ぞ多かり。城永茂が宗徒と頼切。越後

の山太郎。會津の兼丹房を云。一人當千の云。皆討られし。永
 茂も負く。くまの命生阿。附く。越後國。引退き。飛脚を以て。都へ
 住進し。けとごも。平家の人。こころ。代せ。同十六日前。右大将宗盛卿
 大納言。還る。十月二日。内大臣。成多。同七日。悦中。あり。公
 卿。花山院。中納言。を始奉。十二人。扈從。一。藏人。頭親宗。以
 下。殿上人。十六人。前。延。中納言。四人。三位。中將。も。三人。坐。東。國。北。國
 源氏等。蜂の。ど。起。合唯。今。都。乱。入。平家の人。風の
 吹。波。の。立。か。ん。も。知。り。あ。ら。な。い。さ。ら。は。花。か。る。り。中。く。云
 う。ひ。そ。く。ぞ。え。い。ち。る。あ。ふ。今。年。も。暮。く。壽。永。も。二。年。成。り。な。り
 節會。以下。恒。例。の。ど。正月。五日。朝。觀。の。行。幸。あり。鳥。羽。院。六。歳。の
 朝。觀。の。行。幸。あり。其。例。を。守。へ。る。二月。廿。日。宗。盛。公。從。一位。叙

せ。頃。其。日。内。大臣。を。上。表。し。辭。し。是。は。乱。慎。の。爲。と。す
 ける。南。都。北。嶺。の。大。衆。熊。野。金。峯。山。の。僧。徒。伊。勢。太。神。宮。の。祭。主。神。官。の
 至。る。や。向。平。家。を。背。く。源。氏。の。心。を。通。し。け。り。四。海。の。宣。旨。を。成。下。し
 諸。國。へ。院。宣。を。せ。せ。ど。も。皆。是。平。家。の。下。知。と。心。の。あ。ら。ず。隨。附。者。さ。ら。ふ
 ら。り。け。り。又。三。月。上。旬。木。曾。次。郎。冠。者。義。仲。兼。倉。右。衛。門。佐。殿。と
 不。快。の。る。あり。兼。倉。殿。の。木。曾。と。追。討。せ。ん。と。十。萬。餘。騎。を。卒。し。信。濃
 國。へ。突。向。し。善。光。寺。へ。着。し。木。曾。三。千。餘。騎。を。卒。し。依。田。の。城。に。出
 信。濃。と。美。濃。の。境。を。熊。坂。山。の。陣。を。取。乳。母。子。の。次。男。今。井。四。郎。兼
 平。を。使。者。と。右。衛。門。佐。殿。の。并。せ。し。抑。込。東。八。個。國。を。打。後。東。海
 道。を。攻。上。り。平。家。を。追。落。さん。某。も。東。山。北。陸。兩。道。を。打
 從。北。陸。道。を。攻。上。り。一。日。も。先。平。家。を。亡。さんと。存。る。処。の。子。細。は。

此返と義仲中と遠く。平家小父とんや但一叔父の十郎藏入殿と、此返を
根るといふこと。義仲が并へ坐つるは義仲まげらる。鷹谷持成すえて
いふふるべ。是近へ打連す。義仲がたふ全素趣さふいそとすこ
とける。右兵衛佐殿返辞ふ今こそ左様すされども正しう頼朝と対ふ
企あつと使ふ告あつまる者あり。但一そと依へるべと。土肥梶原を
先と。数万の軍を指向らる。やあふ依る。木曾真実意趣
き公頭さん。嫡子清水冠者義重と。十一歳なる。海野望月誼方藤
澤と云。一人當千のまを添る。右兵衛佐殿の并へせしけと。鎌倉殿此上へ
滅ふ意趣あらうけり。頼朝のまご成人の子を持む好く更バ子小致
さんと。清水冠者を相具し。鎌倉へ歸らぬ。玄孫小木曾へ東山
北陸両道を打墮へ既ふ都へ押寄るといふへり。平家去年の冬比より。明

年へ馬小秣飼軍とてと披露あり。山陰山陽南海西海のまごて
雲霞の如く馳湊る。東山道へ近江美濃飛弾のまご参り。東海
道へ遠江より東のまご一人もまご。平家の人。先木曾を討つ。鎌
倉を討つ。と評定。北國へ討つをえ向らる。大將軍。小松三位
中将維盛。惣領。越前三位通盛。惣領。副將軍。薩摩守忠度。清盛
弟。皇后宮亮經正。参茂經盛の惣領。淡路守清房。清盛公の
公の侍大將。中次郎。左衛門盛續。上総大夫判官忠綱。飛彈大夫判
官景高。河内判官秀國。高橋判官長綱。三郎左衛門有國をえとて
以上大將六人然る。侍三百四十餘人。其勢十萬餘騎。四月七日辰の二點
小都を立て。北國へ款を片たせ給くけ。相坂の奥より始る。路
次。持隆。權門。勢家の正税。官物をも怖む。皆奪ふ。志賀。唐崎。三

川尻真野高嶋塩津貝津の道の辺を次第に追捕しと廻りけり
 人民保すしと皆山野に逃散す大將軍の皆進もた副將軍のいま
 江洲貝津に扣へり中ゆも經正の初少少詩教管絃のた長せし人
 ゆく坐けしとる乱る世も風流のふかきを澄し或朝潮の端の打
 出は澳る鳴とん渡し伴のゆ藤多齋尉有教と口あはりの鳴
 ぞと問ふバあはてそゆへる竹生鳴ゆいとやけしとるまんとく
 有教と安右衛門尉守教以下侍六人具しく小船に竹生鳴へま
 とる比の卯月中の八日のところを緑不見ゆる梢ゆ春の情を疎ま
 と疑は湘谷の鶯古声老と初音床し兒子規折知顔小告渡で
 松小藤浪咲くく減小面白くりへる經正のそ舟より海岸に
 揚る此島の氣色とんあふ心も言を及たを彼秦皇漢武或

童男中女ををり或は方士とく不死の薬を求め蓬萊ををり
 音還下と云く徒ふぬの中ゆく老天水茫とく需るざりん蓬
 萊洞のふさるも是ゆととらまは或經の文小胸浮提の内小朝
 あり其中小金輪際より生ゆる水精輪の山あり天女の栖処とりの則此
 嶋のゆるとく經正明神の廣前小願拜ぬ夫大辨功德天の往古如来法
 身大士の妙音辨才二天の名各別んとせし本地の二體小く衆主
 度一歩へり一度歩を運ぶ輩の願願満まると兼まバ頼母うとそとく
 静小法施を居らるる小衛日昏居待の月指とく海上と照渡り社
 壇も弥輝と減小可憐りけしと常住の僧とまはゆとるゆととく
 琵琶ををり經正長ををり彈め入上玄石上の秘曲ゆ小宮の中も
 澄渡り減小面白くりけしと明神も感とるゆととく經正の袖

の上白龍現トくま多り。經正餘尸の森さ小皆く琵琶指置く
かこそ必ひつげらまら

あつやゆる非小のり乃吐たをまると色の破るり

目の前ゆく朝の怨敵と平げ凶徒を退んと疑ふと恰ど船小来

竹生嶋をゆく色とまらまら木曾義仲ハ自ら信濃小在るり

越前國火燧ぐ城を構へる。此城郭小籠る勢平泉寺の長吏齋明威

儀師富経入道佛誓指律新介齋藤太林六郎光明石黒宮崎土

田武部入善佐美と始六十餘騎ゆく籠アくる本より究竟の城地盤

石時廻る四方小峯を連ゆり山を後小一山と前小わつ其前小能美川

新道川とく流まらり彼二の川の落合小大石を累揚大木を伐く逆

茂木小引柵と野一う極上まら東西の山の根小水壅涙く朝小向る

ど影南山を浸一青く見流る。浪西日を沈く紅小七隠倫る

彼無熱地の底ゆ金銀の砂を敷昆明池の渚ゆ徳政の船を停べり

我朝の火燧が城の築地ハ堤を構へ水を濁し人の心を社小

容易度まら松るり平家の大勢向ひの山小宿く後小日ハ

送りける。此城郭小籠る。平泉寺の長吏齋明威儀師平家小志深

うりける。山の根を廻り。消息を書墓目小入る。平家の陣射入る

まは是をみく。大將軍の前小糸披んけり。小此川と中往古小

一旦山川を塞留水を濁し人の心を社小儲へ夜小入足輕たを

切落させらるる。水ハ極まら落べり。急死度まら。後ハ馬の足小好牙

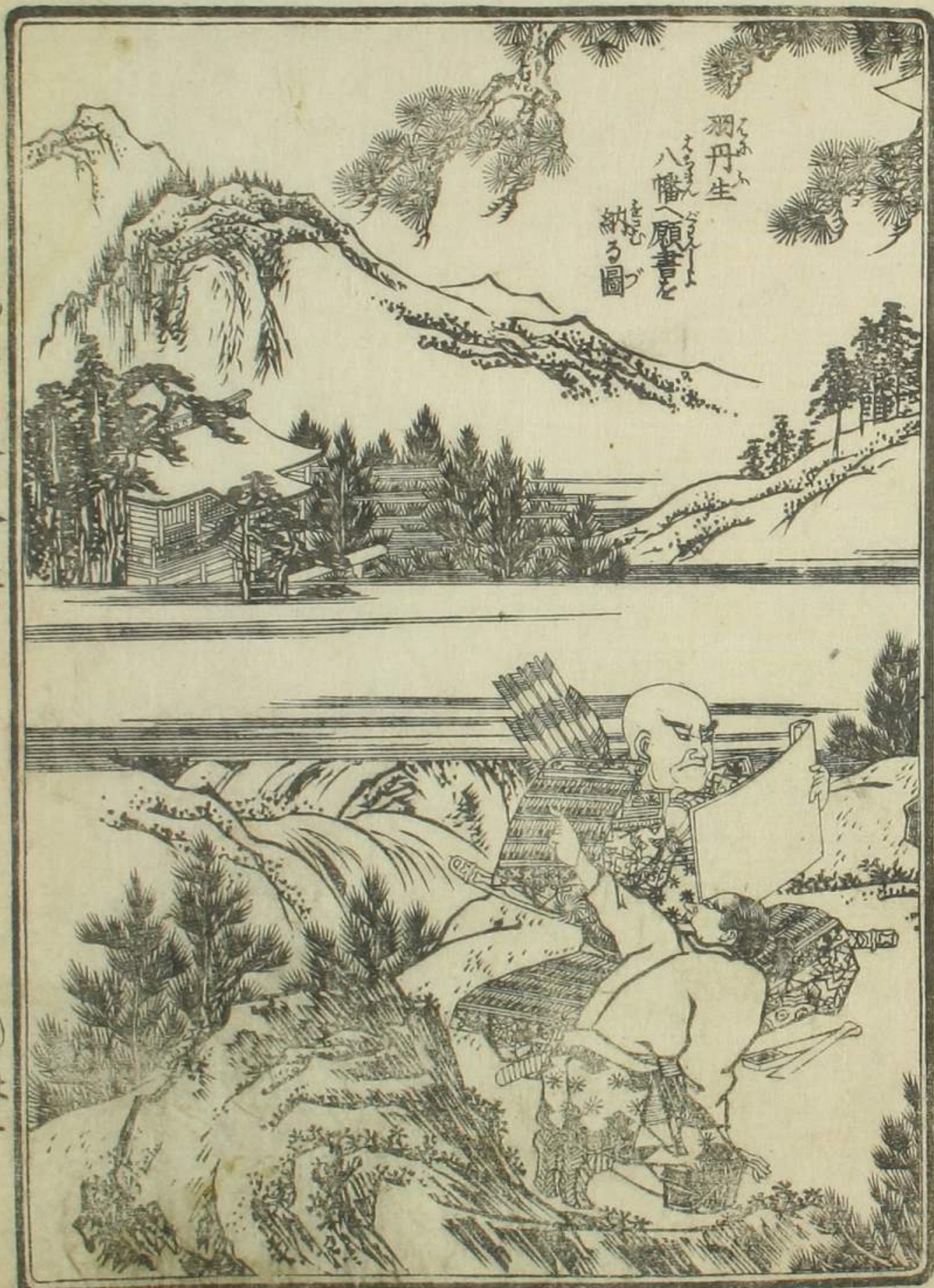
ゆく。後夫を仕らんかく。者ハ平泉寺の長吏齋明威儀師。状と

ぞ。書りける。平家料るる。悦び夜小入足輕たを。柵を斬落させ

らるゝ六波の山川のこゝ程を水へ落めけり平家遷せし頃と
渡も城の内を六千餘騎防ぎ戦ふといふ多勢小無勢對揚一難
齋明へ平家小附く忠をいふ富怪入道佛誓。稻津新介。齋藤大
林六郎光明。叶と名多ひん。加賀國へ引退き。白山内陣をみ平家頭
と加賀國小打。執富榎林。城郭ニケテ焼拂ふ何う面をびく登一丸
ざりけり。困る宿より飛脚を以て。此由都へやたる也。大臣殿と始り一門
のへて勇健びあはるる。同五月八日。平家へ加賀國篠原小着て大
搦二つ小分つ。大ゆの大將へ小松維盛。三位通盛。侍大將。少越中。次
郎。盛盛。續と始と。其勢七万餘騎。加賀城中の境。碓浪山向
ける搦手の大將へ薩摩守忠度。皇后宮佐。經正。淡路守清房。從五位
下。知教。侍大將。ゆ。三郎。左衛門尉。有國。と先と。其勢二万餘騎。能登

越中の境。志保山へぞ向とる。木曾殿。其比。越後の國府。在けるが
是を。五万餘騎を卒と。碓浪山へ馳向ふ。義仲が軍の吉例。ちと
と。五万餘騎を七つ小分り。先叔父十郎藏。入行家。二万餘騎。志保山へ向
樋口次郎兼光。今井兼平の兄。母。今井兼光。落合五郎兼行。今井。七十餘騎。北黒
坂。差。仁科。高梨山田次郎。七千餘騎。南黒坂へ。一けり。二万餘騎
へ碓浪山の下。松長の柳原。株。榎。木。林。小引。隠。今井四郎兼平。六千
餘騎。中。鷺。瀬。を。打。渡。日宮。林。小陣。を。み。木。曾。殿。本。陣。二。万。餘。騎
小野部。の。渡。と。碓浪山の北の端。羽。丹。生。小陣。を。み。と。る。さ。く。諸
勢。の。中。へ。平。家。大。軍。を。み。け。軍。へ。定。掛。合。の。戦。ち。ん。り
合。の。軍。と。六。勢。の。少。ゆ。と。大。勢。山。高。小。掛。つ。取。籠。ら。と。と。と
叶。入。登。う。先。謀。小。白。旗。三。十。流。先。立。と。黒。坂。の。上。小。押。立。と。平。家

平家物語卷之六



平家物語圖會卷之六

九



平家物語圖會卷之六

九

つゞくありや源氏の先陣向ふる何十万騎ありんか籠らして六叶の
中。此山四方岩石ありて櫓を築き下と皆く下居く馬休ん
と。砥浪山もぞ下居ん其時義仲暫く應答躰も持成日を待
夜も入る。平家の大軍後うの俱利伽羅谷へ追落さんと入と下され
け且皆一同の大将の策。圖も當んと見えとく先白旗三十流黒坂の
上も打立とて平家足とんと。徒早源氏の大勢向ひて居ぞ
取籠らしてか突入馬の秣飼水の便も能くそと皆く降居く馬入
この小憩んとく。砥浪山の山中猿の馬場と云ぬ下居る。木曾殿羽
丹生陣あり四方を吃と見え夏山の峯録の樹洞より朱の端離
幽見く形削木造の社の前より雞栖ぞ立ちける。木曾殿園の案内者
を召く尋らる。あまそ八幡ゆ。渡せむいへ所も頻く八幡の領

ぬいと申。木曾殿斜るに怡びし書も見せしとりける。大夫房覺
明を召く吾何んを寄る幸ひ新八幡の宝前も近付奉て既に
合戦を遂んとする。後代のみ且當時祈禱の願書一筆進せしと
ぞ。は是ゆき恐とて下り下り。天明馬より下り紙を延筆をえし
明其日の為躰褐の直垂も黒糸の襪黒漆の太刀と帯二十四差も黒
繩の矢負塗籠藤の弓限も挾も兜も卸も高紐も掛り。此法師本儒
家ゆく。藏人道廣と云勸学院のひらけ出家の後へ最乗坊信敬とて
名乗る。常へ南都へも通ひけり。一年高倉宮三井寺へ入御の時山門
奈良へ牒状とせし。南都の大衆もひけん其返牒へ此信救め
ぞ書せし。抑清盛入道へ平氏の糟糠武家の塵芥と書りし。を太
政入道大怒く何条其信救め。浄海程の者と平氏の糟糠武家の

五文の巻圖會卷之六
廿二

塵芥と書るぞ奇怪之急ぎ其法師を搦捕る梟首せよと宣ふ間南
 都も堪へず北國へ落下す木曾殿の御書も書し大夫坊覚明と改む
 此願書婦女子也 借も願書終つて其身も十三騎が上矢の滴と後
 願書も添へ八幡の宝殿に納めける憑しひらぬ真実の志つたれと照
 覧すりけん雲の中より山鳩云々飛来く白旗の上の翱翔昔神功皇
 后新羅と攻さるひ一時味方の戦怯く異國の軍強くすや角
 とま一時皇后天に祈誓あり云の中より山鳩云々飛来く又
 方の楯の面も顯し異國の軍不日敗るなり又先祖頼義朝臣奥
 列の夷貞任宗任を攻めし一時身方戦ひ弱く凶賊の軍強くし既
 危くまゝ頼義朝臣敵の陣に向ひ是れ全く私火の火あはれ神火
 ありとく火を放つ風忽ち夷賊の方へ吹覆ひ厨川の城焼落ぬ其時

軍破ましく貞任宗任亡びぬけり木曾殿かすの先胆を以て急死馬
 り降兜を脱き水漱とく此山鳩と拜せらるる中こそやけ免源平
 兩陣の間總之断をくり寄合せらるる源氏も進み平家も蒐らるるやあつと
 源氏の方より精進と十五騎撰く楯の面も進せ十五騎が上矢の滴と唯一度
 平氏の陣へ射入るる平家も十五騎を射し十五の滴を射返す源氏二十
 騎と射し二十の滴と射返す平家又二十騎と射し二十の滴と射返
 せん源氏五十騎を射せ平家も同く五十騎と射し百騎を射せ百騎を
 射し兩方百騎と陣の面も進せ互に勝負せん早やける源氏方より禁
 制しと能と勝負せん此後かく応善日を俟暮一夜入る平家の大勢一時
 盡せんとの壽と平家の夢ゆもあつと借も應答日と暮とこそ墓をけし
 平家物語圖會卷之六終

江戸

高井蘭山翁校合

山下可志磨淨書

江戸

有坂蹄齋翁画圖

朝倉伊八彫刻

平家物語圖會

全部十二卷出來

文政十二丑年春日發兌

京師 伏見屋半三郎

攝陽 河内屋茂兵衛

林書

江戸 大阪屋茂吉郎

書

林

京都寺町通佛光寺

河内屋藤四郎

江戸日本橋通壹丁目

須原屋茂兵衛

同 貳丁目

山城屋佐兵衛

同 貳丁目

須原屋新兵衛

同 四日市

山城屋政吉

同 本石町十軒店

英 大助

同 下谷御成道

英 文藏

同 大傳馬町貳丁目

丁子屋平兵衛

同 芝神明前

岡田屋嘉七

大阪心齋橋通

河内屋藤兵衛

大阪心齋橋筋博勞野

河内屋茂兵衛

